



しらさぎ

求めて学ぶ 考えて行こう 自ら鍛える

目黒区立第八中学校
学校だより NO.13
(通巻 113号)
平成28年(2016)
9月1日(木)

夏休みの出来事②

『リオデジャネイロオリンピック』

校長 飯野 博史

リオデジャネイロオリンピックが開催されました。深夜、テレビに釘付けになった人も多かったのではないのでしょうか。日本の獲得メダル数は金12個、銀8個、銅21個…素晴らしい結果で、東京オリンピックに弾みがつきました。世界の強豪選手たちに交じって正々堂々と競技する日本の選手たちの姿に感動しました。表彰台に立ち、喜ぶ選手たちの姿に目頭を熱くしました。選手たちの陰には、温かく支える家族や仲間の姿がありました。

※ 新聞各紙を参考にしました。

■近藤亜美選手 「東京で雪辱誓う」 柔道女子48キロ級 銅メダル

5歳から柔道を始め、中学、高校では日本一。8月の大会に向かう前には、決まって、「プレゼントは金メダルね」と父・敬造さんと母・清美さんに約束した。2人とも8月生まれだからだ。高校卒業後、名古屋から上京する時、清美さんは娘を駅のホームで見送った。「バイバイ」。いつもの遠征気分で新幹線に乗る近藤選手だったが、清美さんはドアが閉まる瞬間、こらえることができなくなった。離れていく新幹線の中から送られてきたメール。「泣かないで。必ずメダルをプレゼントするから。絶対、世界一になるから」。涙が止まらなくなった。

準決勝に敗れて回った3位決定戦。終了間際の袖釣り込み腰で「有効」を奪い、銅メダルが決まると、清美さんは左手を突き上げ、珍しく喜びを爆発させた。

表彰式で、会場にゆっくり上がった日の丸を見て、清美さんの目からまた涙がこぼれた。「真ん中の方がいいのかも知れないけど、亜美が揚げたと思うと……。五輪のメダルなんて、最高の誕生日プレゼントです」。娘は約束を守ってくれた。

■星奈津美選手 「一番幸せな五輪」 競泳女子200メートルバタフライ 銅メダル

2大会連続の銅メダルを獲得した競泳女子200メートルバタフライの星奈津美選手は、表彰台の上で元気よく手を振った。

これまでの集大成のつもりで臨んだ今大会も緊張のためか、準決勝まで思うような泳ぎができず、不安になっていたときだった。

〈奈津美の母でよかった。奈津美のおかげでいろんな経験をさせてもらった。すごく幸せ者です〉レース前、母の真奈美さんからメールがきた。自分の夢のために、家族が協力してくれて、自分の方がよほど幸せ者だと思った。

〈4年間、一番そばで応援してくれてありがとう。ここまで来られたのも、お母さんのおかげ〉。泣きながら、そう返信した。

高校1年の時に診断されたバセドウ病が2年前に悪化。甲状腺を摘出する手術を受けて復帰したが、首を上下に動かすのが怖くて、クロールしか泳げなかった時期もあった。昨夏の世界選手権で五輪代表が内定したあとも記録が伸びず、不安だけが膨らんだ。

毎日、オリンピックのことを考えての生活はプレッシャーとなっていた。それだけにこの日は、「悔しい気持ちはなく、ホッとしている。一番幸せなオリンピックだった」と、すがすがしい笑顔で話した。

■海老沼匡選手 「減量、けが 励まし」柔道男子66キロ級 銅メダル

「金取って一緒に喜びたかったですけど」。3位が決定した試合後、海老沼選手の顔には悔しさがにじんでいた。表彰式でメダルを首にかけてもらおうと、その後、スタンドにいた妻で元柔道選手の香菜さんに向かって思わず舌を出した。

一方の香菜さんは、試合前から涙が止まらなかった。「今までのことを考えたら泣いてきちゃって」。過酷な減量、厳しい代表争い、金メダルの重圧……。苦悶する夫の姿が頭を駆けめぐった。海老沼選手がリオに向けて出発した先月31日。空港への見送りから帰ると、リビングの机の上に手紙が置かれていた。

〈覚悟を持って行ってきます。必ず金メダルを取ります。どんな試合になろうが、最高の舞台での最高の柔道を、香菜の目に焼き付けてください〉

香菜さんは試合中、手紙をお守り代わりに握って応援した。3位が決まった瞬間は、感極まり、思わずタオルで顔を覆った。「つらいときにそばにいてあげられたが、まだまだ支える側として力不足だった」。香菜さんは悔やみつつも、海老沼選手にはこう伝えるつもりだ。「金メダルよりも立派な銅メダルだよ」

■伊藤美誠選手 「4歳からの母の特訓実る」卓球女子団体 銅メダル

試合中、母親の美乃りさんには、幼い頃の娘の姿が重なった。卓球選手だった美乃りさんの練習をそばで見ていた伊藤選手が「私もやりたい」と言い出したのは、2歳の頃。4歳からは、美乃りさんが居間に置いた卓球台で、「特訓」と呼んだ厳しい練習が始まった。「(美誠は)まだ、『ママ、ママ』って甘えていた頃だったが、練習の間だけは感情を押し殺した」。30種類のショットを100本ずつ打たせ、ミスをすれば初めからやり直し。娘の腕は腫れ上がり、時には、振り上げたラケットが勢い余って顔に当たり、血がにじんでいることもあった。練習後、疲れ果てて眠る寝顔を見ていると、涙があふれた。ふと、心配になって胸元に耳を当て、鼓動を確かめたこともあった。マニュアルもない中、毎日が葛藤の連続だった。一方で、海外遠征の費用を稼ぐため、ファストフード店や郵便局の仕事を掛け持ちし、練習後の疲労回復のためにと、マッサージの勉強もした。

3位決定戦、この日は、伊藤選手は落ち着いた様子で優位に試合を進めた。勝利が決まった瞬間、グッと握った両拳を突き上げ、喜びを爆発させると、美乃りさんの目から涙がこぼれた。

■伊調馨選手「母の厳しさ 励みに」レスリング女子58キロ級 金メダル

別れは突然だった。母トシさんは2014年11月、青森県八戸市の自宅で突然倒れた。連絡を受けて東京から駆けつけたがすでに意識はなかった。頭を強く打っていたトシさんはそのまま死去した。まだ65歳だった。

今年1月にロシアで行われた国際大会の決勝で、13年ぶりとなる敗戦を喫した。敗れて受け取った銀メダルは、自宅のたんすの上でトシさんの遺影の横に置いてある。毎日、「練習に行ってくるね」と声をかける。悩みを語りかけながら「お母さんなら何て言うかな」と考える。すぐに答えは出せなくても「何が何でも勝つんだよ」といういつもの母の厳しい言葉が聞こえてくるようで励みになる。親子の「会話」はトシさんが元気なときよりも増えたという。敗戦を経験したことで心も鍛えられ、満を持して臨んだリオ五輪。母への思いを胸に、頂点を求める。

劇的な逆転勝利を収めた伊調選手は試合後、日の丸で涙をぬぐいながら、しみじみと語った。「最後は母が助けてくれた」

メダルをとれた選手、惜しくも逃した選手、それぞれに感動を与えてくれました。どの選手の後ろにも、応援し、支えてくれる家族や仲間がいました。

私たちにも応援してくれる家族や仲間がたくさんいます。私たちも、家族や仲間の期待を背負って毎日生活しています。お互いに支え合い、喜びや悲しみをともにする家族や仲間がいる「ありがたさ」…そんなことにも生徒たちに気付いてほしいと思いました。

さあ、次はパラリンピックです。日本選手の活躍を期待し、応援していきましょう。感動からたくさんのことを学んでいきましょう。そして、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて何ができるか、一人一人が考えていきましょう。

